

野坂昭如

Nosaka
Akiyuki

この国の

何が
われらを
去勢したのか

なくしたもの

BAND

野坂昭如

昭如

Nosaka
Akiryuki

江苏工业学院图书馆

藏书章

この国の

何が
われらを
去勢したのか

なくしたもの

〈著者略歴〉

野坂昭如（のさか あきゆき）

1930年、神奈川県生まれ。養子先の神戸で育つが、45年の神戸大空襲で養父を失い、養家を棄てる。その後生家へ戻り、旧制新潟高校を経て、早大仏文科へ。七年生で抹籍、三木鶏郎音楽事務所でコント、CMソング、テレビ台本などを手がける。1963年、『エロ事師たち』で小説デビュー。1967年、『火垂るの墓』『アメリカひじき』で直木賞を受賞。売れっ子作家として、雑多なメディアで活躍。著書に『わが桎梏の碑』（光文社）、『もういくつねと』『ニホンを挑発する』『赫奕たる逆光』（以上、文藝春秋）、『骨鯨身峠死人葛』（講談社）など多数。

この国のなくしもの

何がわれらを去勢したのか

1997年8月21日 第1版第1刷発行

著 者 野 坂 昭 如
発 行 者 江 口 克 彦
発 行 所 P H P 研 究 所

東京本部 〒102 千代田区三番町3番地10
第四出版部 ☎03-3239-6256
普及一部 ☎03-3239-6233

京都本部 〒601 京都市南区西九条北ノ内町11
☎075-681-4431

印刷所 大日本印刷株式会社
製本所

© Akiyuki Nosaka 1997 Printed in Japan

落丁・乱丁本は送料弊所負担にてお取り替えいたします。

ISBN4-569-55722-8

まえがき

広島、長崎にアメリカは原子爆弾を投下して、数十万人を殺した。ソ連は国際条約を無視、満州に進攻した。いずれについても、日本人は非道のふるまいとみなし、怒っている。しかし、この三つの非人間的行為がなければ、大日本帝国軍部は、まだ戦争を続行、あげく本州決戦に至っていた。本土というなら、すでにまぎれもない「本土」沖縄県が、全土制圧されていた。

あの戦争で生き残った、本州の人たちは、米・ソの、どうみても決定的な敗戦に至っていた日本に対するダメ押しの、「暴虐」的行為に感謝しなければいけない。戦争最高責任者、指導者たちは、昭和二十年に入ってから、腹をさだめかね、延々と評定を重ね、自国の非戦闘員を死に追いやりつつ、まだどこで手をあげていいのか、決めかねていた。八月に入ってからでさえ、国民千万人単位を犠牲にして、なんとか有利な休戦に持ちこみたいと考え、これにとどめを刺したのが、原爆、ソ連参戦なのだ。

軍が、徹底抗戦をいうのは判る。しかし、「戦争」ではなく、「敗戦」責任をとるべきだし、国民はとらせるべきであった。すべてうやむやのまま五十二年が過ぎた。アメリカの植民地として、わが国は、世界でもっとも醜い国ながら、いちおう豊かな日々を過ごして

いる。そして、神戸市、二年半前、地震で潰滅的打撃を受けた街で、小学生が殺され、その頭部はさらしものという事件が起った。容疑者は少年とされている。この、少年の逮捕前と後の、マスコミ、また世間のありさまは、今の日本そのもの。本質について誰も考えようしない。

昭和二十年、大東亜戦争が終った年、ぼくは十四歳。もし、「軍国教育」に憎しみを覚えたとしても、これに狂奔する手合いに対する復讐として、当時、まず小学生は血祭りにあげなかつたろう、いちおう、弱い者は員数外だった。神がかりな教師を殺していたら、クソミソにいわれたろうが、戦後、反戦少年として、英雄視されたに違いない。

また逆に、上陸してきたアメリカ兵の、スキを見すまして、首かつ切り、頭を営門の前に放置したのなら、これは軍国少年の鑑かがみ、神様として祀まつられたかもしれない。

この、極端な例は、戦時下において、十分にあり得た、べつだん異常なことじゃない。戦時中だけじゃない、終つてしばらくは、ぼくも、しれつとして平和を説く教師、進駐軍としてやって来たアメリカ兵に憎しみを抱き、どうせできやしないと思つてはいたが、残酷な殺しを、彼等についてよく妄想した。

「平和」な時代に、異常な事件が発生、世間はあれこれいい立て、まったく他人ごとの如く、びつくりし嘆き、ヤレ学校教育の在りかたがどうした、ホラービデオの影響がこうした、少年法をいじくろうとし、また、アイデンティティの喪失、疎外感、あげく弱い者いじめ

の流行と、あげつらう。すべては、あの戦争を、他人ごとみたいにみなし、あるいは特別な事態と忘れることに専念、極悪非道、人間としてあるべからざることと決めつけて、その是非がどちらにあるにせよ、「平和」を口にしてりや良い、思考停止のもたらしめたもの。

いったんは世界のほとんどを覇権下に収め、また富をかき集めながら、一度、敗けて、たちまち二、三等国に沈んでしまった国はいくらもある。というより、強国の辿るさだめといていい。大日本帝国は、こういった類いの、覇権国にはまだ至らぬうち、四等国に転落、それはいたしかたがない。しかし、一度の敗戦で、文化、伝統を棄て、自らの歴史について考えることを止めた、国家とはいまい、こんな民族はない。また、五十年以上前の勝利国のいうがままとなっている例もない。

もう一度、戦争を考え直してみることだ。まったく異なる文化を、文明とセットにして受け入れ、この二つはうまく折り合いつけて、併在もし得るが、日本の場合、「豊かさ」を求めたあげく文化を殺し、その根底には、日本文化こそが、戦争の源みたいに思いこんでしまった、致命的誤りがある。

日本文化の、具体的あらわれを、ヨーロッパ、中国、アフリカ、インドなどと較べりや、たしかに箱庭みたいだし、極東の島国の産みだしたそれは普遍性を持ちにくい。だが、戦時中にさんざんいわれた、精神力なんてものじゃなく、人間についての認識、生きる上での知恵は、幅広い普遍性を持つ。これは誇りにして当然、押しつけることはない

が、日本人として生きる支えになる。

つくづく思うのだが、ぼくたちは、とまでいわない、ぼくは、戦中、戦後、スローガン、掛声、そして、「戦争」「平和」いずれにしろ、挙国一致の体制にまきこまれ、自分で考えることをせず、また考えたにしろ、これを伝えるに当って、ためらいがあった。なにしろ、年長者のいうことは、まず疑え、権力者の言を信用するなど、これはたしかに、十四歳の時、骨の髄まで思い知ったのだ。それだけにこっちが、年をとり、いやおうなく年長権力者になってしまうと、いい難い。

だが、あえて申し上げる。「本土決戦」で死ぬと、大人がいい、こっちもそんなものかと、具体的には、空襲と飢えから逃げまわっていた五十二年前のぼくの方が、飽食の世に生き、平和を満喫する「少年」より、幸せだった。そして、こんな時代を作ったのは、ぼくたちの世代である。ぼくも犬を撲殺した、食うためだ。少年にとつて、戦時下は幸せな時代だった。個性埋没についていうなら、今より、強制が具体的だったから、あの頃の方が、個性的でありえた。ただし、軍人は別。かつての軍隊の教育は、滅茶苦茶だった。これについての反省もない。ないまま、一方で、なつかしがり、一方では、当然のしつけ教育をおおざりにする。七十歳まで、もう一度、戦争を考え、戦後についていいつづける。

一九九七年七月

野坂昭如

この国のなくしもの

【目次】

まえがき

指導者不在の時代、せめて親は子供の規範であれ

- ◆ — かつて男の夢は指導力ある一群の頭目 21
- ◆ — 天下人三者のリーダー的資質 23
- ◆ — 明治時代以降、わが国にリーダーは不在 25
- ◆ — 天皇絶対を完成させたのは暴力集団「軍」 27
- ◆ — 責任感ある指導者が育たない理由 29
- ◆ — 愚鈍なリーダーの下、大日本帝国は崩壊した 31
- ◆ — 各分野に規範となる人物がいるべきだ 34

「軍国少年」と「少女売春」、いったいどちらがまともなのか

- ◆ — 戦時色のうすかった昭和十年代前半 36

たった一つの敗戦が日本をリビドー低下国にした

- ❖ 「二億火の玉」をいった誰が信じていたのか 39
- ❖ 思いきり自由だった「軍国少年」 41
- ❖ 目前の死をひかえた、それぞれの生 43
- ❖ かりそめの「豊かさ」は若者への爆弾 45
- ❖ 戦時中は今よりもっとふつうだった 47

- ❖ 「戦後」はいつ終ったのか 50
- ❖ 高度経済成長がほくを社会派に変えた 51
- ❖ 今の日本を見直せば世の中すべて「去勢」状態 54
- ❖ 敗戦で農業と文化を失った日本の行く末 57
- ❖ 性的情報が氾濫するなか、男は幼児化、女は影絵に 60
- ❖ もし違う敗け方をしていたら…… 62

他国を責められぬ日本の核事情

- ◆ フランスの「シテデュリーブル」に招かれて 64
- ◆ 核実験で消えた日本文化芸術祭 66
- ◆ 後始末を他国にまかせ核開発に猛進中 68
- ◆ アメリカの核持ち込みを黙認した日本人 70
- ◆ 日本に核武装させないために核で守る 71
- ◆ ぼくにも少しはフランスとの縁がある 74

言葉を失った日本民族の崩壊

- ◆ 歌詞が伝わる往年スターの歌 78
- ◆ 子供は歌から豊かな日本語を体得してきた 79
- ◆ ヨーロッパの国家を支えてきたのは国境と言葉 81
- ◆ 日本人には理解し難いプライドの高さ 84

❖——国境を持たない日本人の言語習得について 85

❖——戦時でさえ抽象的だった「愛国心」 88

❖——自国語を身につけねば民族は滅びる 90

売春少女の未来は自立した強い女

❖——最貧困層で感じた「生」の実感 93

❖——時代にあわせて調子良く生きて来た 95

❖——男女別学世代の多くの女性遍歴 96

❖——堅気の娘とつき合えぬまま世の中は中学生売春へ

❖——女子高生の売春は自己確認の一つの手段 103

❖——セックスを男と対等に楽しむ 105

100

子供造り放題、いい加減な男の話

❖——ぼくの雑用係をしていたある男 108

-
- ◆ 女癖の悪さが露見した婚約問題 110
 - ◆ それでもなぜか結婚に至った 112
 - ◆ 彼と関わりのある女性が次々と登場 114
 - ◆ いったい彼に子供は何人いるのか 116
 - ◆ 彼の心の在り方こそ男として正直なのか 118

コミュニティの確立こそ危機管理の基本

-
- ◆ 地震でわかったわが国の危機管理の現状 123
 - ◆ 個人の力ではいかんとも為し難い 124
 - ◆ 地震は天災だが運不運が前提にある 127
 - ◆ 対処システムをつくる前に倒壊原因を究明すべし 129
 - ◆ 子供のうちに身につけたい共同作業のコツ 132
 - ◆ 個人の危機管理は近所づき合いから 134

老後への備えは蔵書の整理から

- ❖ わが蔵書の内容は「差別」「天皇」「戦争」「昭和」
137
- ❖ 震災で散乱した蔵書が重荷に
140
- ❖ 夥しい量の衣類も整理
141
- ❖ 四十年以上昔を思い衣類を質屋へ
144
- ❖ 手もとに残った生原稿の価値はいかに
146
- ❖ 防空カーテンで派手やかになった書斎の居心地
148

住専問題にももの申す

- ❖ 今どきの広告から察するサラ金事情
151
- ❖ 質屋の仕組みは日本の代表的文化
153
- ❖ サラ金が市民権を得るまでの金貸しの役割
157
- ❖ 預けた金におっとりしている日本人
158

◆ 世の中の一端に触れ得た質屋通い 161

◆ 住専問題は先見性のない連中が引き起こした空騒ぎ 162

「従軍慰安婦」に隠された難問に目を向けよ

◆ 戦後の闇市の会話から知った娼婦の存在 165

◆ 「慰安所」設置に踏み切った戦場の様子 167

◆ 日本国内における年季奉公の実情 170

◆ 兵士百人に一人の割り合い 173

◆ 強制連行はなかったのではないか 175

◆ 「慰安婦」だけを問題視するべからず 177

みてくれ清潔な日本を襲った病原菌

◆ O157患者大量発生の前触れ 180

◆ 五十代まではバイキンの怖さを知らない 182

-
- ◆ 原因不明のO157に終結宣言はない 184
 - ◆ 病原菌対策に医者もお手上げ 186
 - ◆ 抗生物質の使いすぎが大腸菌を変えた 188
 - ◆ 給食のシステムが集団発生を呼んだ 191

ストーリーカー気質の体験的分析

-
- ◆ ストーカーの条件 194
 - ◆ 好きになるのはいいとして、迷惑かけちゃいけない 196
 - ◆ 握手しかなかったストーリーカー 198
 - ◆ 「恋」に「恋」する心理 200
 - ◆ 小説家、評論家には当り前の行為 202
 - ◆ なぜ尾行は楽しいのか？ 203
 - ◆ 稀薄な人間関係がストーリーカーを生む 205

とりあえず「病院死」を拒否すべし

- ◆ 無意識にあるアニミズム 208
- ◆ 死を遠ざければ生の確かめもうすれる 209
- ◆ ふつうの人間の二つの死に方 211
- ◆ 意志をまっとうした学者の死 213
- ◆ 現代日本での餓死は見事な死に方 215
- ◆ 高齢化社会は長く続かない 217
- ◆ 自分で自分の死を始末せよ 219
- ◆ 病院死を拒否して最大の遺産を遺すべし 221

母国語がおろそかになれば、即ち植民地

- ◆ 古典をテキストに日本語を学んでいたパリの学生 223
- ◆ 正しいフランス語を体得してこそフランス人 225